

8月6日 主の変容

ダニ 7:9~10,13~14 IIペト 1:16~19 マコ 9:2~10

1. マコ

v.7 「すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。“これはわたしの愛する子。これに聞け。”」

教会はその信仰の基礎を“キリストに聞く”ことに置いて来たという、使徒たち以来不変の伝統に注目しましょう。典礼暦で8月6日は“主の変容の祝日”となっていますが、この日が日曜日となることは少ないので、宗教改革後のルター派の教会では四旬節に入る直前の主日にこれを振り替えて祝うようにしました。カトリック教会では第二バチカン公会議の典礼刷新を受けて、四旬節第二主日の福音朗読に主の変容のテキストを用いるようにしました。代々の教会がこれほどに重視して来た祝日が、今年はたまたま日曜日に当たったということなのです。

イエス・キリストが神から遣わされた救い主であることを示す神の栄光が、山の上にいる一同を包みみました。そして雲の中から声が聞こえました。イエスはモーセやエリヤのような偉大な人物なのか。いや、それ以上の方である。教会はこれに聞かなければならない……。それが使徒たちがこの物語りに託した意図でありました。

新約聖書ではこの物語りの外に、主の昇天の物語りと主の再臨の予告の中で、雲が出て来ます。旧約聖書では主の臨在の象徴として出エジプトにおいては“火の柱、雲の柱”として(出 13:17-22, 14:19,24)、また荒れ野の旅路において(出 40:34-38、民 9:15-23)、そしてソロモンの神殿の奉献において(王上 8:10)語られており、さらにこの雲は再びメシアの時代に現れると期待されていました(II マカ 2:8)。

“キリストに聞く”とは、使徒たちが伝えるキリストの福音に聞くことです。使徒たちはキリストの(福音の)証人であり、キリストの復活の証人であって(使 1:8,22, 2:32, 3:15, 5:29-32 他)、信仰はこのキリストの福音を聞くことによって始まる(ロマ 10:17)からです。ですからイエスは、復活と切り離してただの不思議な出来事として、イエスの物語りが語られてはならないと、弟子たちに警告されました(v.9)。

使徒たちの証言を無視して直接に、現代のキリスト者が聖書を自ら解釈することによって、独自に新しいキリストのことはそこから聞くことが出来ると考えるなら、それは全く見当はずれなことです。まして、夢や幻を通して“イエス様の声が聞こえて来る”などという話があったら、それは大変怪しいものとして警戒しなければなりません。

2. ダニ

ここに登場する「日の老いたる者」という呼び名は、神の偉大さを表現する古代オリエントの用語の一つと考えられます。「老いたる」とは人生の下り坂にある老人という意味ではなくて、むしろ「今おられ、か

つておられ、やがて来られる方」(黙 1:4)という“永遠の存在”を意味しています。この神の裁きの座の描写は、申 33:2 や、イザ 6 章、エゼ 1 章などを通じるものです。そこに「“人の子”のような者」が天の雲に乗ってやって来て、恐らく終末的な神の国の支配の権威を受けるといふ幻を、ダニエルは見ました。

私たちはこの物語りの本来の意味を十分に知ることは出来ませんが、それでもイエスの変容の記憶をキリストの福音の証言として語った使徒たちの意図を私たちが理解するのに、有益であることは間違いありません。神がそこに臨在し、神自らが使徒たちが伝えるキリストの福音の宣教を支え導いておられることを信じることの出来る人は幸いです。

3. II ペト

v.16 「わたしたちの主イエス・キリストの力に満ちた来臨を知らせるのに……」

いつの時代にも、聖書に書かれているのは“作り話”だと思ふ人々がいるものです。しかし、聖書に集められている諸文書はすべて、もともと人々がその通りに素直に信じることを、そしてイエス・キリストの救いを受けることを期待して書かれました。使徒パウロも自分の手紙について、「優れた(難解な)言葉や知恵を用いませんでした。……それは、あなたがたが人の知恵によってではなく、神の力によって信じるようになるためでした」と言っています(1 コリ 2:1,5)。

II ペト は、「キリストの力に満ちた来臨」を宣教することに特に力を入れている手紙です。死人の中から復活して天に上げられたキリストは、現在力に満ちて生きておられます。そしてやがて力に満ちて来臨されるのです。そのことを宣教している使徒たちの中に、主の変容の目撃証人であるペトロが立っていました。私たちの聖書は、使徒たちによるキリストの福音の証言であり、私たちはそこで使徒ペトロの叫びも聞くのです。そのペトロを頭とする使徒たちの宣教、キリストの福音の証言に、今も外ならぬ“やがて力に満ちて来臨されるキリスト”御自身が共におられることを感謝して(マタ 28:20)、私たちは福音を聖書に書かれている通りに素直に信じようではありませんか。 ハレルヤ、アーメン。

8月13日 年間第19主日

王上 19:4~8 エフェ 4:30~5:2 ヨハ 6:41~51

1. ヨハ

v.44 「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる。」

たとえ、イエスの時代の歴史や、その当時の人々の生活の様子などについて学習しても、それで神の子イエスとその救いが理解出来るわけではありません。18世紀以来多くの“イエス物語り”が書かれるようになり、それによって人々は“自分たちはイエスとその時代について知っている”という印象を持つようになりました。19世紀後半の代表的思想家の一人として有名なルナンは、イエスを“人類の進路を定めた偉大な宗教的天才”として描きました(イエスの生涯／人文書院)。また現代の“解放の神学”は、イエスを“貧困者の中におられる貧しきキリスト”、“我々に解放をもたらす者”として再解釈しています。

しかし、「信じる者は永遠の命を得ている」(v.47)というイエスの言葉は、人がその働きと努力によって獲得する何かを説明しているものではありません。主はここで“父が引き寄せてくださった”人々のことを語っておられるのです。

信仰とは、「神がその愛する御子によって与えてくださった」(エフェ 1:6)救いの恵みを私たちが“承認すること”でありますから、賛美と信仰告白に至るとしても、人間が自ら新しい歴史を創り出す政治的計画を目指すものではありません。むしろ「私たちは今既に神の子ですが、自分が(将来)どのようになるかは、まだ示されていません」(Iヨハ 3:2)というのが事実なのです。

そして、イエスが私たちに与えてくださった「永遠の命」は、“来るべき世の命”ですから、現在の“この世の命”がそのまま継続することでは全然ありません。このように、“終わりの日の復活”と“永遠の命”とは、決して切り離して理解することの出来ないものです。イエスは御自分が、信じる者に永遠の命を与える天からのパンであると、私たちに今も語りかけておられます。

2. 王上

v.7 「起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐え難いからだ。」

エリヤとその後継者であるエリシャは、アハブ王家一族とバアル宗教を根絶したイエフ革命(王下 9-11章)に大きな影響を与えた預言者でしたが、そこに至る歴史を導き、預言者たちを用いられたのは、イスラエルの神ヤーウエでした(王上 19:15-18)。

世俗の人はこの世の歴史に目を向けますが、神の民は救済史(神による救いの歴史)に注目しなければなりません。それは、信仰によってだけ見る事の出来るものであり、聖書を通して私たちに語ってくださる神の導きなしには理解出来ないことを、代々の教会は繰り返し思い起こして歩んで来ました。21世紀を

歩み始めた私たち教会に、主日のミサを通し、ことばの典礼を通して、天上のキリストは再び語りかけておられます。“あなた方のために天に蓄えられている希望(コロ 1:5)、秘められた計画(コロ 1:26)を理解しなさい”と。

3. エフェ

「聖霊により、贖いの日に対して保証されている」(v.30)のは、イエス・キリストの血によって贖われ、罪を赦された民である教会です。永遠の命を与え、私たちが神の国を受け継ぐことを保証してくださる聖霊を、悲しませてはいけないという使徒パウロの言葉を理解することから、現代の教会は久しく遠ざかっていたと言わざるを得ません。

外の世界に向かって反戦や平和を叫ぶ、しかも我が国からは戦争の抑止やテロ勢力排除のための派兵はしないと、まるで全く無責任な批評家のように振る舞って憚らないことが、キリスト教の現代に対する使命だと思っている人々が、聖書をその主張の理由付けに利用するのを見るのは実に悲しいことです。

教会が、教会自身が、聖霊によって与えられた罪の赦しと神の国の約束に共に与っているという、信仰共同体としての一致を、再び取り戻さなければなりません。父・子・聖霊なる神に「倣う者となる」(v.1)という課題は、共にミサをささげる私たち一人一人に今朝呼びかけられているのです。

ハレルヤ、アーメン。

8月20日 年間第20主日

箴 9:1～6 エフェ 5:15～20 ヨハ 6:51～58

1. ヨハ

vv.53-54 「イエスは言われた。“はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちのうちに命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。”」

もし、この福音書のテキストを教会の典礼から切り離して理解するなら、それはただ間違っているだけではなくて、教会の信仰にとっては不当なことです。過去において、聖体拝領を個人的信心として熱心に追求した時代があったとしても、第二バチカン公会議はミサの共同体的性格こそが教会の本来の伝承であることを明確に宣言しました。ピエール・ジュネル神父は、聖アウグスティヌスの残した古い教えを解説して、“つまり、聖体拝領は教会の神秘に対する信仰宣言となるのです”と語っています。

教会は、キリストの血によって贖われ、罪を赦された神の国の相続人たちの共同体でありますから、私たちの地上の典礼は天上の典礼を先取りするものであり、将来受け継ぐ神の国の保証です。このような教会共同体のミサに、信者一人一人が意識的に、敬虔に、また行動的に参加することこそが、典礼憲章の目指している“典礼刷新”であることを再確認しましょう。この“典礼刷新”によって、時代の変遷によってすたれたものが、再び、聖なる教父たちによる本来の基準に即して復元されました。

2.

我が国のカトリック教会で、今なお一部の信者の間で疑義が唱えられている“手による拝領”に関して、ピエール・ジュネル神父の著書から引用してみましょう(「ミサ きのう きょう」180-181 ページ)。

「4世紀から5世紀にかけて、教父たちは聖体拝領の仕方に関する詳しい証言を残しています。……あなたが祭壇に近づくと、手のひらを伸ばしたり、指を広げたりしてはなりません。左手を右手の玉座のようにしなさい。右手は王様を迎えるのですから。そして、あなたの手のくぼみにキリストのからだをいただき、同時に“アーメン”と言いなさい。」

この話は、ユンクマンの「ミサ」255 ページでも同様に証言されています。

さらに、ピエール・ジュネル神父の著書は次のように述べています(前掲 182-183 ページ)。

「……また、8世紀から9世紀に掛けて、……種なしパンが用いられるようになり、……キリストのとうとい血の拝領は廃止され、跪いたまま舌を出して種なしパン(聖体)の小片をいただくことになってしまいました。このような新しい拝領の仕方は、13世紀にはまだ全面的に受け入れられてはいなかったのです。第二バチカン公会議後、信者はようやく、かつてのように群をなして祭壇を囲み、キリストの尊いからだをいただくために手を差し出し、“アーメン”と答え、望むならば聖なる杯からキリストの御血を拝領できるようになりました。」

3. エフェ

vv.18-19 「むしろ、霊に満たされ、詩篇と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。」

もちろんこれは、当時のミサのことを指して語られた勧めです。ミサで歌われる歌は、「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解」(3:18)することから生じた賛歌でありました。それが真実に彼らの信仰宣言の歌となるために必要なことは、「神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐもの(神の国)がどれほど豊かな栄光に輝いているか」、「私たち信仰者に対して絶大な働きをなさる神の力が、どれほど大きなものであるか」(1:18-19)を知ることでした。

現代のキリスト者である私たちが、使徒たちの時代の教会と共に、「私たちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです」(1:7)と、心からの賛美と感謝をもってミサをささげることが出来るように、天上のキリストは今も聖伝と聖書を通して福音を語っておられます。

私たちは「浅はかな者」「意志の弱い者」(箴 9:4)でした。永遠の命を得るために、使徒たちの宣教した福音を真剣に学ばせてください……と、そう告白しようではありませんか。それこそが、「私たちの主イエス・キリストの名により、父である神に感謝」(v.20)するようになるための唯一の道だからです。

ハレルヤ、アーメン。

8月27日 年間第21主日

ヨシュ 24:1～18 エフェ 5:21～32 ヨハ 6:60～69

1. ヨハ

v.68 「シモン・ペトロが答えた。“主よ、私たちはだれのところへ行きましょうか。”」

この言葉は、私たちの典礼書では“主よ、あなたは神の子キリスト、永遠の命の糧”という宣言を伴って、拝領前の信仰告白で唱えられるものです。この箇所はローマ典文では“主よ、私はあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません”(マタ 8:8)が唱えられ、また他のある教派では“私たちはあなたの食卓の下でパン屑を拾うにも値しない者ですが……”と、マタ 15:27 に基づく同様のへりくだりの祈りが唱えられています。

典礼憲章は、“典礼は、個人的行為ではなく、教会の祭儀である”と述べて、ミサの共同体性を明確にしました。この拝領前の信仰告白は、司祭の拝領と会衆の拝領が分離されないようにとの配慮によるとも説明されています(ユンクマン「ミサ」259 ページ)。カトリック教会の典礼刷新は、奉献文こそがキリストの死と復活の記念であって、そこで教会の父なる神への奉献が行われることを明確にしようとしてきました(ミサ典礼書の総則 前文 2、ユンクマン 前掲 231 ページ以下)。このため、供えものの準備(同 49-53)をこれと区別して、会衆は奉納祈願から初めて起立すると定めています(同 20-21)。

ヨハネ福音書の記述は、ミサの理解の不一致によって弟子たちの多くが離れ去ったという、当時の教会の実態の一面を伝えています。ミサは、キリストの血によって贖われ、罪を赦された、神の国の相続人である人々の共同体が“ともにささげる”聖なる行為ですが、それにも関わらずその中には「信じない者たちもいる」(v.64)のです。それは厳粛な事実でありますから、ごまかすことは出来ません。

現代のカトリック教会は、かなり深刻なミサの混乱という危機によって、病んでいるように見えます。しかしそれは、必ずしも近年に始まった特異な現象ではなくて、罪人の群である地上の教会のあるがままの姿であるというのが事実なのです。国や言語や教派の違いによって、いろいろな拝領前の信仰告白が用いられているとしても、それによってキリストの神秘の現存と共同体自身の奉献を信じて告白出来る人は幸いです。

2. エフェ

使徒パウロは、創世記 2:24 の結婚の起源についての記述を用いて、キリストと教会の神秘を説明しようとしてきました。あるいは、結婚というごく一般的な体験を、信仰の神秘について考えるために役立てようとしたのかも知れません。当時の通俗的な結婚観や、グノーシス主義者による旧約聖書解釈に対抗して、「神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会」(使 20:28)を指し示すテキストとして 創世記 2:24 を取り上げた使徒パウロに、現代の私たちも耳を傾けます。

現代人は、過去のどの時代の人々よりも、結婚という男女の関係に関わる困難な問題の数々を、より身近に感じるが多くなりました。離婚だけでなく非婚と呼ばれる道を選ぶ人たちが非常に多くなったことを、単なる道徳の頹廃現象と見なすべきではありません。結婚すること、あるいは結婚を継続することがどんなに大変なことであるかを、以前よりも多くの人々が実感するような時代になったと言うべきです。

同様に、わたしたちすべて(教会)のために、その御子をさえ惜しまず死に渡された(ロマ8:32)神の愛がどんなに大変なものであるかを、現代人が理解する鍵が、このテキストにあると言えます。「わたしには受けねばならない洗礼(受難)がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう」(ルカ12:50)、「わたしは死ぬばかりに悲しい」(マタ26:38)と語られたイエスの“大変な受難の愛”を、現代人はより身近に実感することが出来ると言うべきでしょう。

私たちは、キリストと教会の神秘を信じるようにと招かれているのです。恐らく私たちの答えはただ一つ、「信じます。信仰のないわたしをお助けください」(マコ9:24)だけであると知りましょう。

3. ヨシュ

ヨシュアはイスラエルの全部族をシケムに集めて、告げました。「あなたたちは、…… 仕えたいと思うものを、今日、自分で選びなさい。ただし、わたしとわたしの家は主に仕えます。」(v.15) そして、民は答えました。「わたしたちも主に仕えます。」(v.18)

私たち一人一人にとって、主日のミサは毎回、この問いと答えを交わす場です。私たちは新たな信仰の決断をもって、拝領前の信仰告白を唱えます。“主よ、あなたは神の子キリスト、永遠の命の糧、あなたをおいてだれのところに行きましょう”と。それによって、キリストの神秘の現存と共同体自身の奉獻を信じることの出来る人は幸いです。 ハレルヤ、アーメン。